シオンの童話集

vol. Ⅱ

Xion

ー　収録内容　ー

第 4 話　　７人のサンタクロース

目をさました孤児マイクは目の前に
７人のサンタクロースがいることに
びっくりします。
さて、サンタクロースのくれたプレゼントとは？

第 5 話　　蛍のちょうちん

雨宿りをしていた旅ネズミは老ウサギの家に泊めて
もらうことになります。
数日後のある夜ネズミは旅をつづけることにします。
そのとき夜道のためにウサギにもらったちょうちんとは・・・

第 6 話　　旅人とロバ

旅人とパンダ柄のロバがくりひろげる珍道中。
はたして道中になにがおこったでしょう。

７人のサンタクロース　１

　雪はしんしんと降りつづき、街の建物の壁には吹き溜まった雪が氷のように固くなり、それに街灯の光が反射してキラキラと耀いています。
　やっとのことでプレゼントを配りおえたサンタが、街の中を走り抜けようとしたときでした。

　建物と建物の間で、黒くて小さな影が動いたような気がしたのを目の端でとらえたのです。
　いったんは通り過ぎたサンタでしたが、どうしても気になって、もう一度その場所に引き返すことにしました。
　サンタがソリを降りて近づいてみると、小さくて黒い影は小刻みに震えているようでした。

　さらに近づいて覗き込むと、そこにはボロボロのコートを身にまとった男の子がうずくまっている姿がありました。

「どうしたんだい？　こんな真夜中にこんな場所で？　カゼをひくから早く家に帰りなさい」
　突然の声におどろくようにして顔を上げた少年は、目の前にたたずむサンタを見てさらにおどろきの表情を見せました。
　サンタが薄暗い中に少年の顔を見たとき、目にまったくちからのないのに気づきました。
　手袋をはずしてそっと手のひらを額に当ててみると、ひどい熱でした。

　少年をこのままにしておくわけにもいかず、サンタは少年を抱きかかえるようにしてソリに乗せ、プレゼントの入っていた袋の中に潜り込ませると、雪の中にふたたびソリを走らせました。
　家に着いたサンタは、少年を袋ごと抱きかかえて家の中に運び込み、早速暖かなベッドに少年を寝かせました。少年は余程気持がよかったのか、先ほどまでとは違って、穏やかな顔になって深く深く眠りました。
　しかし、時々熱にうなされたように、「お母さん」「お母さん」と呼ぶのです。

　そんな少年の姿を見たサンタは、何とか母親を探し出してやりたいと思いました。

3

　少年が目をさましたのは、次の日の夕方でした。サンタは暖かいコーンのスープをこしらえて少年の前にすすめると、空腹だった少年は脇目も振らず懸命にスプーンを口に運びました。そしてスープ皿からふと顔を上げたとき、信じられない光景に目を疑いました。

サンタクロースが七人もいたのです。

　その七人のサンタクロースの目は、申し合わせたようにベッドで食事を摂る少年に向けられています。少年はまるで七匹の狼に睨まれたウサギのように身をすくめるのでした。
「君の名前は何ていうんだい？」
　昨日のサンタが優しくたずねました。
「マイクだよ」小さな声でいいました。
「そうか、マイクか。ところでマイク、あそこで何をしてたんだい？」
「何をって？」
「つまり、家に帰らずにあそこにいたっていうことは、ひょっとして、家出をしたのと違うのかい？」
「ううん、違うよ。ぼくにはもともと家なんてないんだ」

「家がない？　もしよかったらそのわけを話してはくれないかい？」
　マイクはそういわれてしばらく黙ったままでいました。やがて意を決したようにぼつぼつとこれまでのことを話しはじめたのです。

　マイクの話はこうでした――。

　小さいときから父親のいないマイクは、ある時期まで母親とふたりで細々と暮らしていたのですが、生活が思うようにならなくなり、母親は涙を飲んで修道院にマイクを預けることにしました。

　マイクは母親の、「しばらくしたらきっと迎えに来るから、それまで我慢しておくれ」といい残した言葉を信じて、迎えに来てくれるのを楽しみに毎日を過ごしていました。
　一年が経ち、二年が過ぎるようになると、だんだん母親が恋しくなったマイクは、修道院を脱け出してお母さんを探すことにしました。修道院を出て、街に行けば必ずお母さんに会えると思ったのです。
　マイクは、毎日足が痛くなるまでお母さんを探し廻りました。しかし、どこを探してもお母さんの姿はありませんでした――。
それを聞いたサンタたちは、マイクのベッドから離れてどうしたものか相談をはじめました。

　結論は決まっていました。六人でマイクのお母さんを探すことです。あとのひとり、つまりマイクをここに連れて来たサンタが、マイクの面倒を看ることになりました。

　みんながマイクのお母さんを探しに行っている間に、マイクにはどうしても聞きたいことがありました。それはここに来てからずっと気になっていたことです。
「ねえ、サンタさん。どうしてサンタさんが七人もいるの？　ぼくいままでサンタクロースはひとりしかいないと思ってた」
　マイクは真剣な眼差しでいいました。
「話してもいいけれど、これはマイクしか知らないことだから、誰にも話さないって約束してくれるかい？」
「うん、約束する」
　マイクは目を耀かせるようにしていいました。

「じゃあ君を信じて話してあげよう、マイク。よく考えてごらん……地球っていう星は、想像もできないくらい大きな星なんだよ。そこに住むすべての子供たちに一日か二日で平等にプレゼントを配るのは不可能だとは思わないかい」
「そういえばそうだよね。もらえなかった子供はかわいそうだもんね」
「だろ？　だからみんなしてプレゼントを配らなきゃいけないのさ」

　あくる日、昼食がすんだあとサンタはマイクにもう一度修道院に戻るようサンタは懸命にマイクを説得します。最初しぶっていたマイクですが、ようやく決心したと見えて、小さな頭をコクリと立てに振りました。
それを見たサンタたちは、早速修道院に向かうことにしました。
　一台のソリに七人のサンタと、マイクが乗り込み、街はずれの修道院に向けて走りはじめました。もちろん御者台にはサンタの横にマイクが嬉しそうな顔で陣取っています。

　ソリが走り出してしばらくするとふわりと体が宙に浮きました。ソリが空を駆けているのです。それまで神妙な顔をしていたマイクが、声にならないような歓声を上げました。
　森も、川も、山も、見渡す限り白い雪に覆われ、絵本のように、そして箱庭のように小さく見えます。それらのすべてがズンズン後ろに流れるように消えてゆくのです。
「ヒヤッホー、すごい、すごい。こんなのはじめてだ。最高のクリスマス・プレゼントだよ」

　やがて遥か下のほうに小さく街が見えはじめてきました。それがどんどん大きくなってくるのがたまらなく楽しくものでした。
　みんなは街はずれでソリを降ります。人目があるので街の中までソリでゆくことは無理だったからです。
　修道院に近づくにつれ、だんだんマイクの元気がなくなっていきます。無理もありません。それはマイク自身がいちばんよく知っていることです。
　修道院の前まで来ると、マイクは顔を上げてサンタたちの顔を見ました。サンタは黙ったまま、顔だけで修道院の扉を開けて中に入るように伝えました。
　マイクはしぶしぶ扉を開け、礼拝堂の中に入りました。つづくように七人のサンタも中に入ります。祭壇には無数のキャンドルに灯がともり、身が引き締まるような荘厳な空気に包まれました。

　シスターの前まで行って見上げたとき、これまでのシスターとは様子の違うのに気がつきました。さらに近づいてよく見ると、それはシスターではなく、これまで会いたくてしかたなかったお母さんだったのです。
　マイクは自分の目を疑いました。間違いありません。
　するとそのとき、
「マイク、ごめんね。約束したのに、これまでマイクを迎えに来れなくて……」
　懐かしいお母さんの声でした。
「母さん！　会いたかったよ、ぼく」
　マイクも涙で声になりませんでした。
久しぶりに対面した親子はしっかりと抱き合いました。マイクの目からは大粒の涙が止めどなく流れ落ちています。うれし涙でした。

　しばらくこれまでの悲しみを忘れるかのように母親の胸の中にいたマイクは、思い出したように母親から離れてそっと後ろを振り返りました。
　しかしこれまで入口のところで見守ってくれていた七人のサンタの姿はすでにありませんでした。
「サンタさん、ありがとう。きっと約束は守るからね」
　と、小さくつぶやくようにいいました。

　窓の外には、きれいな白い雪が踊っていました。
（完）

蛍のちょうちん　1

ある夏の夕方、突然空がまっ暗になり、大つぶの雨が地面につきささるように降ってきました。

ネズミはしかたなしに大きなイモのはっぱの下で雨やどりをすることにしました。
ところが雨はいっこうに止む気配がありません。
止むどころかだんだん激しく降り出し、おまけに雷まで鳴り出しました。
雨にぬれてズッシリと重くなった上着を脱ぎながら空を見上げてネズミがぽつりとつぶやきました。
「この雨は止みそうにないから、どこか泊めてくれそうな家をさがすしかないな」

しかたなくしばらく雨やどりを続けていると、背中から細い声が聞こえてきました。
「どうしたんだい？」ネズミは驚いて声のする方を振り返りました。すると、うす暗い中に一匹の年老いたウサギが立っていたのです。

「急に雨が降ってきたので雨やどりをしてるんです。もしよかったら、一晩だけでも泊めてもらえませんか」
　ネズミがいいました。
　老ウサギは少し考えてから、「何もかまうことはできないけど、それでもよかったら泊まってきな」と親切にいってくれました。
ネズミはたいそう喜んで、ウサギの後についていばらで出来た家の中に入りました。
　家の中は広々としていました。
　夕飯をごちそうになったネズミは、よほど疲れていたのかワラのベットで深い深い眠りにつきました。

　ネズミが目をさましたのは、次の日のお昼近くでした。
　畑仕事からもどったウサギがいいました。
「よく眠れたかい。お昼のしたくがしてあるからゆっくりおたべ」
親切なウサギはそういうと針仕事を始めました。
　昼ご飯を食べながらネズミは考えました。この家にいるうちは食べ物にこまらないからウソをついてしばらく世話になることにしよう。さっそくネズミは体調が良くないことをウサギにいいました。
「そりゃあ気のどくだね、いいよいいよゆっくりやすんできな」
　親切なウサギはいやな顔ひとつしずいいました。

ネズミはしめたと思い、次の日も次の日も老ウサギを手伝うこともせず家の中でぶらぶら、ゴロゴロとすごしました。
そして、四日目の昼過ぎにそろそろあきてきたのかやっと旅を続ける決心をしました。
その日の夜、旅じたくをしているネズミを見ていいました。「こんな夜中に出ていくのかい、気を付けてゆきなよ。そうそうこれを持っていきな、夜道はぶっそうだから」
ウサギがさし出した物を見ると、細い木の枝の先に糸がぶら下がり、糸のはしには小さなホタルが黄色い灯りを放ちながらつかまっていました。

ホタルのちょうちんです。

たいそう明るいものでした。

「ウサギさん、町へ行くにはどうやって行ったらいいんだい」と道をたずねました。
　ウサギは家の前に出て「この道をしばらく行くと大きな切り株があるから、そこを右に曲がって山を下ったところが町だよ」
　ネズミはちょうちんを手にすると、今までのお礼もいわずにその場を立ち去りました。
　老ウサギはそんなことを気にもかけず、点いたり消えたりするちょうちんの灯りを追うように見送っていました。
　するとどうでしょう、切り株のあたりで右ではなく左に曲がって行くではありませんか。
　ウサギは心配になって追いかけようと思ったのですがなにぶんこの時間です。それにネズミのほうが足が速いことがわかっているので仕方なくあきらめることにしました。

次の日、ウサギは畑仕事の帰り道昨日ネズミが曲がった切り株へ寄り道してみることにしました。
ここを左に曲がってどこへ行ったのだろう、ウサギはそう思いながらネズミが行ったほうへ歩いてみました。
しばらく行くと草むらにネズミに渡したちょうちんが落ちているではありませんか。
ところが、あたりを見回してもネズミがいる気配などありません。
あきらめて帰ろうとしたそのとき、助けを呼ぶ小さな声が聞こえました。
その声は近くの穴の中から聞こえてきました。おそるおそるその穴をのぞき込むと、昨日のネズミが水のたまった穴の底で溺れかけて助けを呼んでいたのです。

あわててウサギはそばにあった木のつるを穴の中へ投げ入れました。
　ネズミは木のつるをよじ登ってやっとのことで穴から出ることが出来ました。
「ウサギさん、助けてくれてどうもありがとう」
　ネズミはふかぶかと頭を下げ丁寧にお礼をいいました。
「よかったねえ、ちょうちんの灯りのおかげだね」ウサギは微笑みながらいいました。
　それからのネズミは、命を助けてくれたウサギへの恩返しのつもりで畑仕事を手伝ったり、いばらの家を修理したりして冬が来る前まで老ウサギと一緒に暮らしました。（完）

旅人とロバ　1

　夏も近くなったある日の午後。
ひとりの旅人が暑さに耐えかねて、大きなオレンジの木の下で庇のある帽子を顔に乗せて昼寝をしていました。
　するとそこへ一匹のミツバチが飛んできて、昼寝をしている旅人の頭のあたりをぐるぐると何度も廻りはじめました。
　旅人は羽音をわずらわしくおもったのか帽子を少しずらして片方の目だけ出し、ミツバチを見つけると手にした帽子でミツバチを追い払おうとしました。
「旅人さん、昼寝の邪魔をしてごめんなさい。
けっしてわる気があってやったんじゃないんです。みんなと一緒にミツを集めにきたんですが、寄り道してる間にはぐれてしまったんです」
と、悲しそうにいいました。すると旅人は、
「君はどこからきたんだい、遠くからきたのかい」
「はい、向こうの山の森あたりからです」
ミツバチは涙まじりの声でいいました。

「それはかわいそうだ。ちょうどその方向へいくから、陽が西に傾いたらおまえを送っていってやるよ。だからもう少しがまんをして待ってな」
　旅人はやさしくいってくれました。

　夕方近くになって旅人は腰を上げ、帽子をかぶりなおし、杖がわりの棒の先に荷物をくくりつけ、それを肩に背負うとゆっくり歩きはじめました。
「さあ、いこうか。今日中にはたどりつけないかもしれないがそのうち帰れるだろう」
「ありがとう」
　旅人とミツバチはいろんな話をしながら薄暗くなった山道をゆっくりと進んでいきました。しばらくいくと、背中の方から奇妙な音が聞こえてきました。
グォンガラリン。ゴォンガラリン。
グォンガラリン。ゴォンガラリン。

旅人は足を止めてうしろを振り返ったのですが山道は曲がりくねっていて見通しがききません。
仕方なくうしろを気にしながらふたたび歩きはじめました。
ところが、その気になる音はどんどん近づいてきます。
どうしても気になった旅人は、山道のきわに立ち止まってその音を待ちました。
すると、向こうからうなだれて山道を登ってくる一匹のロバが目に入りました。
そのロバを見た旅人は驚きました。
目の廻りと四本の足、それとお尻の部分がまっ黒で、ほかは薄汚れた白い色のロバだったのです。
先ほどから気になっていた音は、ロバの首からぶら下がっている大きな鈴が歩くたびになる音でした。
旅人に近づいたロバは、
「こんにちは、旅人さん。突然ですが、もしよかったら一緒に旅をさせてくれませんか」
ロバは元気のない声でいいました。
「どうしたんだね、ロバ君。こんな見ず知らずの者と一緒に旅がしたいなんて」
旅人は突然のことに少し驚いた様子でいいました。

「じつは、僕は山のふもとの農家に飼われていたんですが、ついこの間、主人が僕を町に売る話を立ち聞きしてしまったんです。
　それは、僕がほかのロバと外見が違うから高く売れるということらしいんです。僕だって好き好んでこんな姿になったんじゃないんです。
　でも現実にこんな姿なんですから仕方ないといえば仕方ないんですが、町に売られるのだけはどうしてもいやで、水汲みにいく振りをして逃げてきたんです」
　旅人が見ると、ロバの背中の両側に水がめがくくりつけてありました。
「そうか、そういうことなら一緒に旅をしてもかまわないよ。でも一つだけ条件がある」
「な、なんでしょう。その条件というのは」
「いや、そんなに難しいことじゃないよ。君のその首からぶら下がってる鈴が鳴らなければいいことなんだよ。どうもその音が気になってね」
「そんなことなら、おやすいことです。好きなようにしてください。僕が好んでつけた鈴じゃないんですから」

　それを聞いた旅人はロバの首に手をのばし、金属で出来たがま口のような形の鈴を持つと、
　一本のひもで鈴の中のおもりを動かないようにしばりつけました。
「さあ、これでよし。それじゃあ出発することにしよう。あ、そうそう、私の肩にミツバチがとまっているだろ、まずはこの子の家をさがさなければならないんだよ。なんでもこの山の向こうあたりらしいんだ」
「それなら僕にまかせてください。主人について薪ひろいや、きのこ取りにいったことが何度もありますから、あの辺にはけっこう詳しいんです」
　ロバは少し元気がでてきたみたいでした。
「出かけるまえにロバ君に頼みがある。君の背中のおいしそうな水を私に一杯飲ませてくれないだろうか。のどが渇いて仕方がないんだ」
　旅人はそういってうまそうに水をのどの奥に流し込みました。
　その一口の水をもらったおかげで元気がわいてきて、力強く歩きはじめました。

　休み休み山道を歩きつづけ、お昼近くになった時、いままでおとなしくしていたミツバチが急に、「母さんのにおいがしてきた」といって旅人の肩から勢いよく飛び立ち、ずんずん先の方へ飛んでいきました。
　しばらくすると、こんどは数匹のミツバチが旅人に向かって飛んできました。
　そしてその中の一匹がいいました。
「うちの子が迷子になったのをここまでつれてきていただいて、本当にありがとうございます。なんとお礼をいったらいいのか……」
　ミツバチの母親だったのです。
「いやいや、なんにも気にすることはな次の日、野宿で一晩明かした旅人たちは鳥のさえずりと共に目をさまし、朝早く旅立つことにしました。
あたり一面ミルク色の朝もやに包まれ、まるで雲の中を歩いているようでした。
　こっちの方向に来るついでだったのだから。まあ無事に帰れてよかった、よかった」
「ありがとうございます。もし先を急ぐようでなければ私たちの家にお寄りください。何もおかまいできませんが」

　そういわれて旅人とロバはミツバチのあとについていきました。
　三十分ほど歩いたでしょうか、先をいくミツバチが山道からそれて森の中に入っていきます。
　旅人たちはついていきました。
　長いこと緑の森を歩いていくと急に視界がひらけ、小さな洞穴があるのが目にはいりました。
　ミツバチたちはその穴の入口に向かって飛んでいきます。
「ここが私たちの家です。いま、おいしいハチミツを持ってきますから、そこでゆっくり休んでいてください。これをなめるととても元気が出るんです」
　ミツバチの母親はそういって洞穴の中に入っていきました。
　しばらくしてしたたり落ちるほどのハチミツが旅人の目の前に運ばれました。
　旅人とロバは遠慮なしにおなかいっぱいハチミツをなめました。
　すると今度は、父親のミツバチがそばに来て、
「旅人さん、お願いがあるのですが、聞いてもらえないでしょうか」と、深刻な顔でいいました。
「あらたまって、どういうことなんだい。ひととおり話してごらん」

「じつは私たち困ってることがあるんです。
　というのは、この近くにいたずらグマが住んでいて、私たちがせっせと蓄えたハチミツを盗みにくるんです。
　ついこの間まで別の場所の木のほらに住んでたんですが、そのいたずらグマが巣をめちゃくちゃにしてしまったんです。
　私たちはたまらずここを見つけて引越してきました。ところが、最近またあいつがこのあたりをうろつきはじめたんです。
　何とか追い払うのに力をかしていただけないでしょうか」
　たのまれたらいやといえない旅人は、目をつむり腕を組んで考え込んでしまいました。
　その姿はまるで昼寝でもしているかのように見えました。しばらく考え込んで、突然何かを思いついたように、目を開いて手を打ち、
「いい考えが思い浮んだ、もう心配することはない。私にまかせなさい」
　そういうと旅人は腰を上げ、森の中へ何かを探しに出かけました。

　森からもどった旅人の手には葉っぱのたくさんついた木の枝が数本にぎられていました。
　ロバを少しでも大きくみせるためその枝をひもで結んでロバの首にかけ、ロバの首にぶら下がっていた鈴のおもりのひもをはずしました。
　そしてロバの耳元で小さな声で何かをいいました。ロバは大きくうなずいています。
「これで準備はととのった。ミツバチ君、もう二度といたずらグマが近づかないようになると思うよ」
「ありがとうございます」
「礼をいうのはまだ早いよ。早くクマ公の驚く顔がみたいもんだ」

　陽が沈みかけてあたりが薄暗くなり、鳥たちが巣に戻りかけたとき、どこか離れたところで、
ガサッ、ガサガサッ。ガサッ、ガサガサッ。
木の枝のすれる音です。
クマです、クマがあらわれたのです。

旅人は姿を見られないように近くの藪に身をかくしました。
洞穴の前にはロバだけしかいません。
ロバは恐怖で足が震え、心臓が口から飛び出しそうでした。
しかしこうなったら旅人にいわれたようにするしかありません。
クマの姿が見えはじめました。クマはあっちへうろうろ、こっちへうろうろ。なかなか近づいてきません。
もう少し近くに来たら作戦の開始です。もう少し……。
ロバとクマの目が合いました。今です。ロバは後ろ足で立ち上がると、
グヒッ、グヒヒヒッ。グヒッ、グヒヒヒッ。
大きな声でいななくと同時に首を大きく振って鈴を思いきり鳴らしました。
グォンガラリン。ゴォンガラリン。
グォンガラリン。ゴォンガラリン。

　クマはいままでに見たことのない生き物に出会ったのと、突然の出来事にびっくりし、大きな体をゆすりながらうしろも振り返らずに一目散に逃げ帰りました。

　次の日、ミツバチは何度も礼をいいながら、ロバの背中の水がめにあふれんばかりのハチミツをわけてくれました。
旅人とロバは町までいき、水がめのハチミツを売ることにしました。
　奇妙なロバのハチミツ家は物珍しさも手伝って、あっという間に売り切れてしまい、その日はひさしぶりの晩ご飯らしい晩ご飯をおなかいっぱい食べ、旅人はいままで寝たことのないようなベッドで眠ることができ、ロバもやわらかい藁のふとんの上で眠ることができました。
　一週間ほどして、旅人は雑貨屋でレンガとセメントを買い、ロバの背中にくくりつけると、あのミツバチの家に向かって歩きはじめました。

　ミツバチの家の前まで来ると、ロバの背中から雑貨屋で買った品物を下ろし、洞穴の入口に手際よくレンガを積みはじめました。
「これでもしクマがハチミツを盗みに来てもだいじようぶだ。まあ、あの驚きようからしたら二度とあらわれないと思うよ」
「親切に、ありがとうございます。あれ以来クマを見たことがありません。本当にたすかりました」
　ミツバチたちは旅人に向かって深ぶかと頭を下げ、また水がめいっぱいのハチミツをくれました。
　ふたたび旅人とロバが町にもどると、この前のお客がすでに首を長くして待っており、運んできたハチミツはたちまちのうちに売り切れてしまいました。
　それ以来、奇妙なロバと旅人のうわさが町に広がり、荷物運びを頼まれたり、お祭りに呼ばれて子供たちを乗せたりしてたいそう人気者になりました。
　旅人は旅を続けるのをやめ、儲けたお金で町外れに小さな家を買うと、ロバと一緒にいつまでもなかよく暮らしました。

（完）